

『救いは勝ち取るものではありません』

ローマ人への手紙 4章 1節—8節

1 それでは、肉によるわたしたちの先祖アブラハムの場合については、なんと云ったらよいか。2 もしアブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇る事ができよう。しかし、神のみまえでは、できない。3 なぜなら、聖書はなんと云っているか、「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」とある。4 いったい、働く人に対する報酬は、恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。5 しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである。6 ダビデもまた、行いがなくても神に義と認められた人の幸福について、次のように云っている、7 「不法をゆるされ、罪をおおわれた人たちは、さいわいである。8 罪を主に認められない人は、さいわいである」(ローマ4章1節-8節)。

私達は毎週、ローマ人への手紙をみています。神は人類との関わりを持つにあたり、まず最初にユダヤ民族という一つの民族を選び、彼らに天来の律法をお与えになります。この律法に生きることにより彼らが幸いな日々を送るためであります。しかし、そこに問題が起きてきました。そう、それは彼らが神に与えられた律法を守れないということでありました。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」とビートたけしは言いましたが、一人で渡ろうが、みんなで渡ろうが、それは違反であります。この世の法律は「赤信号を渡ってはいけません。渡ったら処罰されます」と言います。聖書は「赤信号を渡ってしまった私達はどうしたらいいのか」ということについて書き記してあります。

ここには二人の人の名前、アブラハムとダビデが出てきます。彼らは聖書において最もよく知られ、親しまれている人達です。アブラハムはユダヤ教、イスラム教、キリスト教において信仰の父と尊ばれている人です。ダビデの歩んだ生涯と彼が書いた詩篇は今日でも世界中の人々に愛されており、今日のイスラエルの国旗はダビデの星がモチーフとなっています。なぜパウロはこの二人に注目しているのでしょうか。パウロはこの二人の生きざまを取り上げ、「我々

が救われるのは、その行いによるのではない」ということについて私達に語りかけているのです。

「人が救われるのは、その行いによるのではない」という考えは当時、驚くべき考えでありました。なぜなら、当時のユダヤ人は「自分達はその行いによって救われる」と堅く信じていたからです。すなわち彼らは、今までお話してきましたように「割礼」を受けている者や「律法」を守っている者達こそが神の目にかなうものであり、そこに人が救われる道があると信じられていたからです。

そして、このことはユダヤ民族に限らず、私達も当たり前のこととして受け止めています。こういう苦勞をした、努力をした、修行をした、それゆえに私達は受け入れられる、評価される、救われるという考えをもっており、このことは道理にかなったこととして受け入れられています。

パウロがローマ書を書き残さずに、この辺りのことを明確にしていなかったら、おそらく今日の教会は存在していなかったことでしょう。仮に存在していたとしたら教会ではこんなことが起きていることでしょう。「クリスチャンになりたい人は一年間、ここにある10冊の本を読んでそれぞれに対するレポートを提出してください。そして、必ず、毎週、教会の掃除をしに来ることを忘れないで下さい。鈴木さん、あなたは昨年、三回礼拝をやすみましたからすまだ救われていませんよ」とか「ここに100問の神学的な質問があります。この内、95問以上解くことが出来た人は救われます。合格者の発表は来週の木曜日です」「あなたはまだ修養が足りません。一週に三回の訪問伝道、もう少し自分を磨いてから教会に来て下さい」というように。

2節には「もし、アブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう」と書かれています。「行いによって義とされる世界」において私たちは思うのです「私が一生懸命やったから、神だって目を向けてくれたのだ。救いの手を伸ばしてくれたのだ」。そこには私達が自分で救いを勝ち取ったという誇りが生まれてきます。そう、それは「私は救いを勝ち取りました」というメダルをぶらさげて、胸をはって生きてくようなことです。そ

して、時を経ずしてそうではない人達を見下げて生きるようになります。

パウロはこのような「行い」によって救われるという考えに対して断固ノーを唱えました。それはパウロの思いつきではなく、これは「あなたがたの慕っているあの信仰の父であるアブラハムの人生」にも「あなたが尊敬しているイスラエルの王であったダビデの人生」の中にもうかがい知れるものだと言うのです。パウロが「アブラハムやダビデが実は行いによって救われたのではなく、神を信じる信仰によって救われたことをあなたたちは知らないのか」とここ言っているのです。

さて、それではアブラハムはどんな人生を送ったのでしょうか。彼は偶像崇拜が支配する地域で生まれ育ちました。しかし、ある時神が「アブラハムよ、お前は偶像崇拜の中にいるが、それではいけない。その所から離れて、私の示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」との神の言葉を聞くのです。創世記12章1節と2節に書かれているとおりです。そして、その言葉を受けて彼はその年75歳の時、すなわち自らの旺盛な働きをもって神に何もアピールができなくなった年齢となって彼は住みなれた土地と親族に別れて、そこからでていきます。

その時点でアブラハムと妻サラの間には子供がおらず、当然、高齢となった彼らに以後、子が与えられるということは肉体的に不可能でありました。しかし、神はその彼らに一人子、イサクを授けます。アブラハムが99歳、サラが89歳の時でした。しかし、その子が与えられますと今度は、アブラハムにとって最も大切なその一人子イサクの命を捧げなさいと神様はアブラハムに命じます（創世記22章）。

言うまでもなく、せっかく授かりました一粒種の命を捧げることなどできるはずがありません。しかし、アブラハムは神が言われたようにイサクを捧げるべく祭壇を築き、彼をそこに寝かせ、自ら剣を振り上げ彼を殺そうとしたのです。しかし、その剣がいよいよ振り

下ろされようとした時に神様はそれを止められ、神は彼に言われたのです『16 わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかつたので 17 わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする』（創世記22章16節-17節）この出来事はアブラハムの驚くべき神への服従と信仰の行為でした。

しかし、このような驚くべき服従と行いがあった時に彼は神によって救われ、神のものとなったかといいますと、実はそうではないのです。彼が神様から義と認められる時というのはこの前の創世記の15章6節にでてくるのであって、それは彼がイサクを捧げる前なのです。

それではその時というのはアブラハムにとってどんな時だったかといいますと、彼の調子がいい時ではなく「とてもじゃないけれど神など信じられるか」というような時だったのです。

その時とはアブラハムの甥であるロトとその家族が他国の王に拉致され、その財産も略奪され、しかし、何とか彼らを助け出した時でした。助け出せたことはよかったけれどもこのような危機を通り抜けると「神がいるなら、どうしてこんなヒドイことが起きるのか」というような思いがわく時でもあります。また、神を信じ従って故郷を後にして出てきた、その時に神は「私はあなたを祝福し、あなたを大いなる国民とする」という、私に多くの子孫を与えて下さるという約束が与えられたにも関わらず、それから年月が経ち、彼はその時に既に90歳になっていました。「あの約束は何だったのだろうか」というような諦めと不信仰、失望を感じ始めているような時だったのです。

そんな時に神様はアブラハムを夜、外に連れ出して言われました「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」「あなたの子孫はあのようなになるでしょう」（創世記15：5）。これらの言葉に対して「アブラハムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた」（15：6）と記されています。

彼が失望落胆していた時に、まさしく不信仰にすら陥りそうになっている時に神は彼を義と認めたのです。何によってか。「彼が神の言葉を信じることによって」です。そこにアブラハムの行いは全くありません。

ダビデはどうでしょうか。彼もアブラハムと同じようにユダヤ人から多大なる尊敬を受けている人です。彼は一介の羊飼いかからその神への忠信によってイスラエルの王となった人です。しかし、彼の人生はいつも模範的な信仰者であったかといいますと、そうではないのです。彼にも過ちがありました。

彼の過ちとは何だったのでしょうか。そう、私達は第一にあの失敗を思い起こします。その時、彼はイスラエルの王であり、アンモン族との戦いの最中にありました。勝利は既にイスラエルの手中にあり、ゆえに彼はその指揮を全て部下に任せ、王宮において安らかな昼寝をしていたと聖書は記しています。しかし、その安逸な場所がときに最も危険な場所になりました。

昼寝から目覚めて、気分よく外の空気を吸おうと思ったのでしょうか、ダビデは王宮の屋上に出てきました。夕日に輝く眼下にあるエルサレムの町並みを眺めておりました時に、眼下に水を浴びている忠実な部下の妻の裸体をダビデは見ました。彼は彼女が欲しくなり、その女、バテシバを王宮に呼び関係を持ち、彼女はダビデの子を身ごもります。この罪を隠そうとダビデは、様々な策略をたてますが、願うようにはならず、遂には自分に忠誠を誓っている部下、バテシバの夫ウリアを戦いの最前線に送り戦死させるのです。

彼は一度に姦淫、虚偽、そして殺人という大罪を犯しました。まさしく償うことなどできない罪です。今や彼はまさかさまに霊的な死に転落するかに思われました。しかし、神は何者をも恐れない預言者ナタンを彼のもとに遣わし、ダビデは自分がなしたことを真剣に悔い改めたのです。詩篇32、51。

行いということを考えるならば、ダビデに救われる余地はありません。彼はその人生のほとんどを神に忠実な者として生き、神は彼を祝福しました。しかし、彼が最も好調で、何事もうまくいっている、

その言動に落ち度がない時に彼を義とはされなかったということを私達はこの朝、確認したいのです。

神様はこのダビデがどん底にいた時に、その時にこそ神は彼を引き上げ、彼を救われたのです。このローマ4章7節、8節に書かれている「不法をゆるされ、罪をおおわれた人たちは、さいわいである。罪を主に認められない人は、さいわいである」という言葉は詩篇32篇1節、2節に記されている言葉で、それは一連のバテシバ事件の後、ダビデが深刻に悔い改めた時に歌われたものなのです。これは、自分の功德によらずに神に受け入れられた人の幸いについてのダビデの心からの言葉なのです。

そして、今、ダビデとアブラハムについてお話ししましたが、何を隠そう、このローマ書を書いたパウロも「行い」によらず、神の恵みによって救いを受けたのでした。彼が神と出会ったのは、彼がキリスト教徒を迫害し、殺害の息をはずませながら、ダマスコに向かっている途中でした。その時に主は彼に語りかけられたのです。そこにどうにか神に救われようと努力しているパウロの姿は微塵もありません。

「クリスチャンは品行方正な人がなれるのですか」。時々、聞かれる質問です。「そうです、品行方正になるまでクリスチャンにはなれません」「じゃー私、がんばります」（何をがんばるのか）。そうでしょうか？そもそも、神様が人間の努力で神に近づくことができるのだと思うことは傲慢なのではないでしょうか。天地万物を造られた神様が塵からご自身造られた人間に向かい「100回、滝に打たれれば私はあなたを救おう」と言われるのでしょうか。それは、ノミが自分の力だけで太陽に触れようというようなものです。

そうではなく、私達が神を見上げ、あなたを信じますと既に差し伸べられている御手を握る時に神は私達を救われます。これを私達は神の恵みと呼ぶのです。そこには私達が神様を納得させようとする努力や修練、行いはない。ただ、神の恵みが降り注がれるだけなのです。私達が背伸びをして、私達がジャンプをして、私達が天へのはしごを登って神に触れることなどはできないのです。あちらからの延ばされている御手を私達が信仰をもって握るのです。

クリスチャン作家のフィリップ・ヤンシーはこんな言葉を残しています「天国に行くには何をしなければならぬかと聞けば、たいいていの人「良いことをしなさい」と答える。イエスの話はその答えと矛盾する。私達がしなければならぬことは「赦して、助けて」と叫ぶ事なのです。

家の茶碗を子供が割ってしまった時、子供が恐る恐る「ごめんなさい」と言うのなら許さない親はいないでしょう。腕立て伏せを20回したら許してやるという親はいないでしょう。「ごめんなさい」という言葉で十分でしょう。否、素直に謝ることができる子供を私達は愛しく思うでしょう。詩篇51篇17節でバテシバとの関係が明らかになったダビデが「神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません」と言っているとおりで。

ゼーレン・ケルケゴールはさらに驚くべきことを書いています。「罪人のこととなると神は黙って立ち、腕を広げて「こちらへ来なさい」というのではない。いや、なくなった息子を待つ父親のように、神はそこに立って待っているが、むしろ進んで探しに出かけられる。いなくなった羊を探す羊飼いのように。なくなった硬貨を探す女のように。神は出て行く一しかし、違う、神は出かけてしまわれた。神は神であることから人間になるほど、事実果てしなく長い距離を歩き、そのようにして罪人達を探しに出かけられたのだ」。

いうまでもない、この私の下に来られたのがイエス・キリストなのです。私達がこのイエスを信じる時に私達は救われるのです。ここには私達の努力も善行もないのです。私達はその修練、その貢献、その功績を問われることはないのです。神様はありのままの私達を赦し、受け入れてくださるお方なのです。救いは私達が試行錯誤の末に勝ち取るものではなく、この世に勝利を取られた、罪に、死に勝利を取られたイエスを信じる時に私達にもそのキリストの勝利が与えられるのです。生きている限り、色々なものを私達は失うことでしょう。色々なチャンス逃すことでしょう。しかし、たとえ何を失っても、どんなチャンスを見逃してもこのイエス・キリストが私達にくださるものを受けそこなってはなりません。そう、それを受けようと願う者は、今日、それを受け取ることができるのです。これが神の恵みであり、これが人に示されている神の愛なのです。

2017年9月10日 『救いは勝ち取るものではありません』

お祈りしましょう。天のお父様、誠にあなたは私達をよく知っておられます。私達の業には常に限界があり、私たちはその業によって自ら救いを勝ち取るなどできないことを。しかし、そんな私達に対してあなたはその御手を差し伸べていてくださるばかりか、私達のために、本来あなたがいるべき場からも離れて、私達を救うために、私達の元へと出かけられてしまったということ、心より感謝します。どうか、今、私達の心を砕き、このあなたの愛と恵みの世界へと飛び込むことができますように導いてください。
主イエス・キリストの御名によってお祈りします。